

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣良次

2018. 7
No.299

TOYOTA GAZOO Racing
ラリーチャレンジ in 八ヶ岳 茅野

4月22日、トヨタ ガズーレーシングラリー
に出場しました。チーム名はINATEC GG
Vitzです。今回は個人のヴィッツを私費
で改造し、6名(現取締役、T.P.M.山下さん、
生産管理・伊佐治さん、生産技術・横山さん、
AW技術部・服部さん、私)のチームでした。

私がドライバーで、山下さんがコ・ドライバー
(ナビゲーター)を務め、他のメンバーはサービ
スや車体メンテナンスとチェックを行っていただ
きました。

成績は90車中86位でしたが、無事完走で
き、チームの皆さんに感謝申し上げます。

(ちなみに、このレースにはトヨタの豊田章男
社長も“モリゾー”というネームで出場され、9
位という素晴らしい成績でした)

このラリーに挑戦したのも、イナテックが製
造しているCVTミッションで、どのくらい走る
魅力を引き出せるのかを試したかったのです。
普通はマニュアルトランスミッションでの出場が当
たり前のところ、あえてイナテックで製造して
いる部品が搭載されているCVTで挑戦して、
皆さんと運転のテクニックを楽しみたい、もっと
仕事のやりがいにつなげたい、そして、それが
『働きがい』『働き方改革』に発展すれば、こん
な楽しいことはないと思っただけです。

“車好き”の社員の皆さんが自分たちで車の
手入れをし、プロのドライバーにドライブテクニ
ックを教えていただき、最高のパフォーマンスと
究極の“安全運転”ができれば、それも社会貢
献ではないでしょうか。

自分たちでつくっているCVTの部品が、どん
な機能で、どのように作ればもっと安全に速く
走れるのかをイナテック社員で考えられるよう
になれば、ものづくり屋のイナテックとしては、
最高のものになるのではないのでしょうか。

今回は8月26日(日)の京都丹後に出場し
ますので応援よろしくお願ひします。
皆さんで楽しみましょう。

沖縄・東海ヨットレース2018で2連覇

今年のゴールデンウィークに、沖縄の宜野湾
から蒲郡までの国内最長距離(約1500キロ)
のヨットレース「沖縄・東海ヨットレース2018」
にチーム「ジョーカー(X・41)」の一員として参
加し、総合優勝することができました。

このレースは4月29日に出発して、5月3日
にゴールしましたが、最終日、潮岬を超えて熊
野灘に入った5月2日夜から3日未明、あたり
は真つ暗で暴風雨、しかも大きく悪いうねりが
凶暴に襲い掛かる厳しい状況の中でのレースを
強いられました。

しかし、これこそがロングオフショアレースの醍
醐味で、ここしか得られない経験でした。何が
起きるかわからない自然と向き合い、乗組員が
お互いに助け合つて困難を乗り越えました。そ
の結果、総合優勝を勝ち取ることができました。

このコンディションの中での2連覇は、非常に価値がありました。

今回の過酷なロングオフシヨアレースは、会社経営にも仕事に対する心得にも通じるものがあります。

まずは“準備力”です。あらゆることを想定してセールプランを決定し、それをどの場面でのように活用するのか、というものです。

次には、“チームメンバー”に恵まれたことです。各ポジションに素晴らしい技量を持った人たちの協働でセーリングできました。

皆で助け合い、意見を言い合っていく中で、艇

長(スキップパー)が最適解を求めて判断、実行し、それに従いすべての乗組員が全力を出し尽くします。

まさしくイナテックの企業理念という『相互啓発型』のチームづくりではないでしょうか。一つ間違えれば命を落とす危険な状況の中で、いかに全員の技量を考慮し、安全に最速で航海することが絶対条件となります。

チームメンバーに感謝するとともに、神様にも感謝申し上げます。それは、私が43年間ヨットをやり続けたことへの神様からのご褒美だとも思っています。これも企業理念で言い続けている『凡事徹底』継続は力なり』と同じです。皆さん一緒に頑張りましょう。

最後に、留守を守っていただいた社員の皆さんにも感謝です。ありがとうございました。

六一

簾櫺高敞、看青山綠水吞吐雲煙、識乾坤之自在。竹樹扶疎、任乳燕鳴鳩送迎時序、知物我之兩忘。

簾櫺（れんろう）高敞（こうしょう）にして、青山綠水の雲煙を吞吐するを看て、乾坤の自在なるを識る。竹樹扶疎（ちくじゆふそ）として、乳燕鳴鳩の時序を送迎するに任せて、物我の兩つながら忘るるを知る。

高樓のすだれ窓から眺めると見晴らしがよくて、青い山々や緑の流れが、雲やかすみを自由に出入りさせているのが見え、天地の自在なたらきがよくわかる。また、竹や木々が枝葉を茂らせて、つばめがひなを育て、はとが鳴いて、時節をたがえず送り迎えているのが見え、（わが心はこの自然と一体になって）、物と我との区別もすっかり忘れてしまう。

